

# あるツーリストエリアの系譜

## ——ネパール、カトマンドウの「タメル」を事例に——

森 本 泉

### 1. はじめに

カトマンドウの市街地に、外国人ツーリスト向けのホテルやレストランが建て込んだ賑やかな一郭がある。「タメル」として知られるそのツーリストエリアは、1980年前後からぼつぼつと、そして民主化が達成された1990年前夜には、地元関係者の言葉を借りれば「マッシュルームのように」建物が新築・増改築され、ホテルやレストランが相次いで開業されてきた。1 km四方程度の範囲におよそ150軒のホテル（1997年1月）が看板を掲げ、ネパールの中でもっとも稠密にツーリスト・ファシリティが集積している場所である。視界を埋める看板にはシャングリラ、パラダイス等といった、時空間的に遠い所から眺めれば、桃源郷のイメージを彷彿させる幻想的な言葉が並ぶ。それらは、外国人ツーリストに向けられたネパールを表徴する代表的な宣伝文句として、国際ツーリズムにおける情報メディアを通して世界に流通している。外国の情報メディアによって情報操作され、「キッチュ」なイメージで塗り固められてきた「タメル」は、それよりも以前、カトマンドウの「自律的」な発展の中に存在していた。本稿では、「タメル」という場所がいかなる経緯を辿って——歴史的にも空間的にも——そこにツーリストエリアとして展開し得たのか、カトマンドウの都市的発展のコンテクストに位置づけて考察しようとするものである。なお、本文では括弧付の「タメル」とした場合、ツーリストエリアとして認識される「タメル」を意味し、タメルとした場合は「タメル」の一郭に名づけられた地名を指示する。

「タメル」がツーリストエリアとして外国人ツーリストに認識されるようになったのは、Britton (1991) の指摘する「場所の商品化」概念に準じていえば、そのイメージや社会地理的クリシェが国際的情報メディアを通して流通することに成功

した結果である。ここで注意しなければならないのは、誰が何を意図してどのようなイメージを創り上げて流通させたのかということである。開発途上国のツーリズム開発に通底する問題であるが、開発途上国の多くにはツーリストを送り出す諸外国の国際情報発信力に拮抗する力があるとは言えず、往々にして一方的に情報操作される立場に置かれ、その結果冒頭で触れたようにオリエンタリズム的な桃源郷のイメージが創り上げられてきた。そして、かつて外国人がネパール像を構築する過程で創り上げられた先の「幻想」的なイメージは、近年ではネパール人によって本質化され、ことにツーリズム業界において、戦略的に用いられるようになっていく。内田（1987）が指摘するように「地名には少なくともそれがつけられた当時の人々の場所イメージをある程度表現している可能性があり、地名の語源や由来やその分布を探ることによって、過去の場所の様子や人々の場所に対する関係を知る手がかりとなる」とすれば、「タメル」とそこに含まれる地名を検討する作業から、その場所とそこに関わる人々の系譜を明らかにすることが可能であろう。本稿は、ツーリストエリアとしての表層——「キッチュ」な様相——におおわれた「タメル」の履歴を探る試みでもある。

以下、2章ではカトマンドウの都市的発展について概観してから、3章でタメルに含まれる地名やそれにまつわる語りを検討する。4章ではそれらを踏まえた上で、「タメル」を創り上げているイメージを素描し、「タメル」の来歴を辿ることで結びにかえる。

### 2. カトマンドウの都市的発展における ツーリストエリアの展開

#### 2. 1. カトマンドウの都市的発展

カトマンドウにおける都市の形成は、ネパールの「建国の父」プリティビ・ナラヤン・シャハが

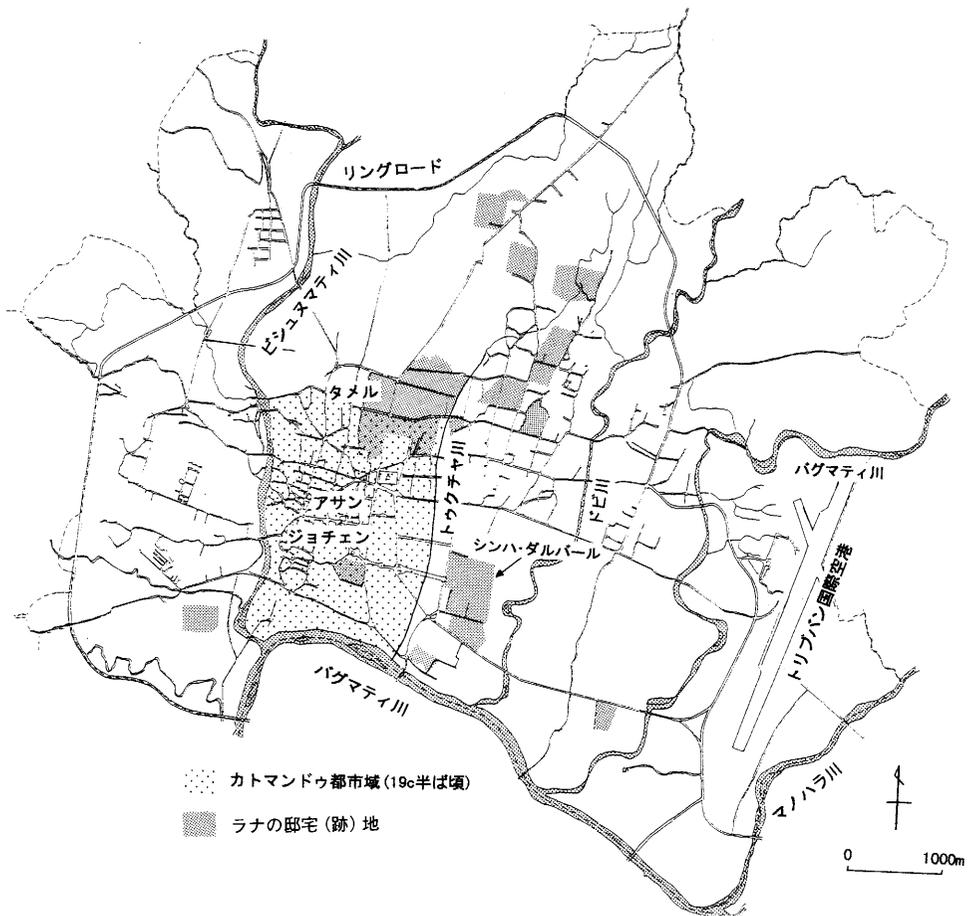


図1 19世紀半ばにおけるカトマンドゥ都市域、及びラナ家邸宅の分布 (Theophile, Erich (1995) より作成)

その盆地を征服した18世紀半ばに始まるとされる。それ以前は、ネワールというチベット・ビルマ語系の民族がカトマンドゥ盆地を中心に国を築き、独自の豊かな文化を発展させていた。ネワールが当時のカトマンドゥの中心域に稠密な住宅地を形成していたのに対し、シャハ王を戴きつつ実質的に実権を掌握した宰相一族ラナ家の人々は(支配期間は1847-1950年)、その権勢を象徴する西洋風の壮大な邸宅を郊外に造営した。合計で約40あまりの宮殿のような大邸宅が造営された邸宅造営ブームは、19世紀末のシンハ・ダルバールの造営で頂点に達する (Theophile, 1995)。図1から当時のカトマンドゥ都市域<sup>2)</sup> Kathmandu saharaの周縁にラナの邸宅が分布していることが読み取れる。ラナは当時の都市域すなわち寺社を

中心に形成されたネワールの居住地域を侵すことなく、活動を展開していたのである。邸宅造営と並行して、それら邸宅間や市の中心部とを結ぶために道路が敷かれた。1970年代初頭の居住地域における人口分布(図2)が示すように、その沿道から住宅地が広がり、商業が興ることになった。カトマンドゥの乱開発は、このようなラナによる無秩序な邸宅造営が引き金となったことはよく指摘されるところであるが<sup>3)</sup>、一方でTheophile (1995)のように、それらの邸宅が今では役所や病院、ホテルなどに利用され、道路も公共のインフラストラクチュアとして整備・拡充されていることから、発展に寄与したとして好意的に評価する向きもある。

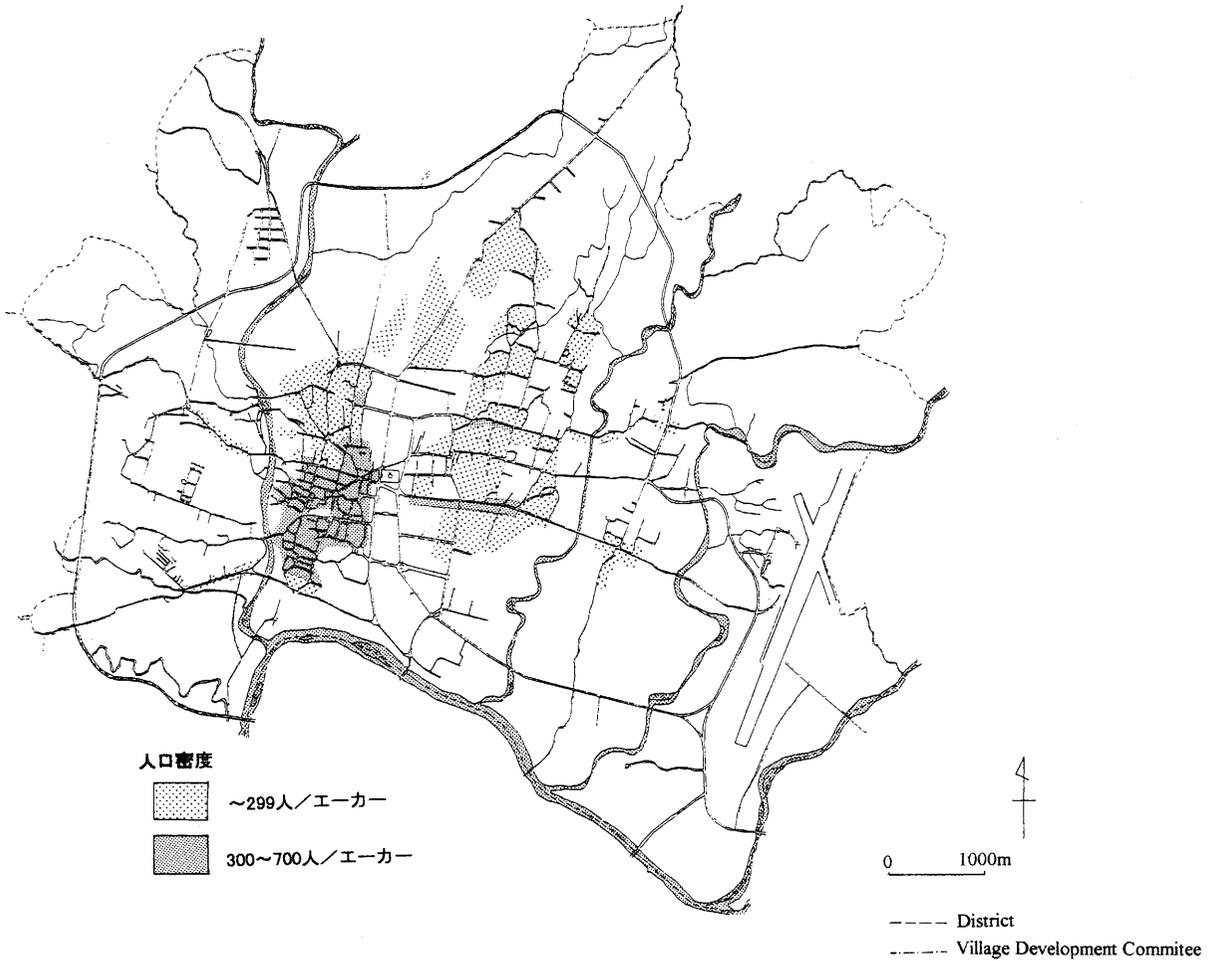


図2 ツーリズムの展開以前のカトマンドゥにおける居住地分布 (P. P. Karan (1973) の地図を編集・作成)

## 2. 2. ツーリストエリアの展開

——ジョチェンからタメルへ——

1951年にラナの専制政治が崩壊し、王政復古をもって国体が変革された。鎖国が解かれると、登山家の垂涎的である世界最高峰のエベレスト、ならびにヒマラヤの未踏峰にネパール側から登れるようになった。これにより登山家や探検家をはじめ、多くの外国人が訪れるようになった。1960-1970年代頃、ヒッピーの「聖地」としても名を挙げ、多くのヒッピーが訪れるようになっていた。その当時、ネワールの集住地域であるアサンの南に位置するジョチェンに宿泊施設が軒を連ねていた<sup>4)</sup>。そのジョチェンはガイドブックに

ネワール語の地名であるジョチェンではなく、英語のフリーク・ストリートという名で紹介されヒッピーのたまり場となっていた。

現在先進国と呼ばれる国々が高度経済成長期を経ると、ツーリズムの大衆化の波が世界を席捲し、ネパールにも及ぶ。ネパールを訪れるツーリスト数が急増し<sup>5)</sup>、ジョチェンでは対応しきれなくなった。図1・2から分かるように、現在「タメル」と呼ばれる地域は、その当時カトマンドゥ都市域の境界に位置し、寺院(次章で述べるバグワン・バハール)の周りにネワールが集住していたものの、畑や空地が広がっていたという。そこにはラナの二つの大邸宅(図3に示すケシャル・マハルとバハドゥール・バワン)の他に、比較的「小さ

な」——とはいえ他の一般の家に比べればかなり大きな——ラナの邸宅が複数造営されていた。経済的政治的権力を掌握していた一族が数十世帯居住していたことから、電気水道といったファシリティが他の地域よりも早くに拡充されていたことは想像に難くない。

以上から、カトマンドゥの都市的発展の過程において、「タメル」にツーリストエリアが展開されることになった経緯は次のように考えられる。外的要因として、ツーリズムの展開に伴うツーリストの増加、それに対するジョチェンの空間的拡大の限界、そして場所に染み付いたイメージ——ヒッピー文化——を忌避するツーリストの増加が挙げられる。一方、「タメル」の誘因として、ラナの邸宅の集積<sup>6)</sup>とそれに随伴したファシリティの整備、本稿では言及できないが先駆的役割を果たした「企業家」の存在が指摘できる。「タメル」にツーリストエリアが展開する蓋然性は必ずしもあったといえないが、新たなツーリズムへの転換期、すなわちマス・ツーリズムの黎明期の時機に投じたといえよう。

### 3. 「タメル」の概観

#### ——ツーリストエリア以前——

この章では、「タメル」における地名からそこに名づけられた頃の様相を素描する。(地名の位置については図3参照)

「タメル」には広い庭に囲まれたラナの大邸宅が二つある。一つは1895年に造営されたケシャル・マハルであり、今では教育省に利用され、その一郭は私設図書館として一般市民に公開されている。もう一つは1889年に造営されたバハドゥール・バワンであり、1952年にネパール初のホテル、ロイヤル・ホテルとして著名人を迎えたりもしたが、今では選挙管理局として利用されている。タメルよりも少し北側にはバグワン・バハールという寺院がある。この周辺にはネワールの古い居住地が広がり、ツーリストエリアが展開される以前から人口密集地域であった(図2)。繰返しになるが、カトマンドゥはその昔、ネワールの人々が生活を営んでいたところにラナを含むネパール語を話す人々が移住してきた。ラナー族は多くの邸宅を造営し、西洋をはじめとした外国の文化を積極的に取込んできた。このような歴史を考

慮すれば、場所の名前にネワール語、英語、ネパール語が用いられていても不思議ではない。「タメル」も例外ではなく、ネワール語(タメル, タヒティ, ジャタ), 英語(ナーシング・キャンプ, J. P. スクール・ロード), そしてネパール語(チェトラパティ, ケシャル・マハル, トリデヴィ・マルグ)の地名を持つ。

さて、「タメル」形成の核となったタメルについて考えてみよう。『地名辞典』(Shrestha, 2044<sup>7)</sup>)によるとネワール語のタネ+マハ+ビハールがタムバヒルとなり、やがてタメルに変化したものだという。その意味は、都市の上の方にある(タネ)大きな(マハ)寺院(ビハール)である。この大きな寺院とは、大乘仏教の学識豊かなディーパンカラというベンガル王家出身の高僧が、ヴィクラム暦1098年に、仏教の布教をすべくチベットへ向かう途上カトマンドゥに一年間滞在した間に建てたとされるバグワン・バハール<sup>8)</sup>のことである。タメルの少し北側に位置し、そのあたりを指示する地名となっているが、その範囲はタメルの範囲に包摂される。

バグワン・バハールについて次のような伝説がある。昔、神力を備え、人々から崇拜されていたバグワン・バルという人がいた。彼はしばしばチベットへ赴き、宗教的知見を広げると同時にチベット人と交易を行っていた。ある時、彼は奇妙な夢を見、魔物の気配を察知して同行の仲間たちと帰途を急いだ。しばらく行くと白馬に会い、後ろを振り返らぬようにと忠告された。彼らが小川にさしかかると美しい女性たちに出会い、渡ろうとすると立ち去らぬよう懇願された。彼女たちの悲しげな声につられて振り返ると、そこにいたのは美しい女性ではなく驚くべき醜い魔物であった。襲いかかってきた魔物たちにバグワン・バルを除いてみな食い殺され、彼はタメルの農家に逃げ込んだがすぐに魔物たちに見つかってしまう。バグワン・バルは勇敢に魔物たちに立向かい、次々と倒していった。残った魔物たちは彼に慈悲を乞い、タメルの人々に危害を加えないことを約束させられた。このバグワン・バルの勝利を祝して建てられたのが、バグワン・バハールである(TTDC, 1997)。

チベットに行く途中でタメルに寺院を建てた実在した高僧ディーパンカラと伝説のバグワン・バルとが重なってくる。このタメルという場所は宗

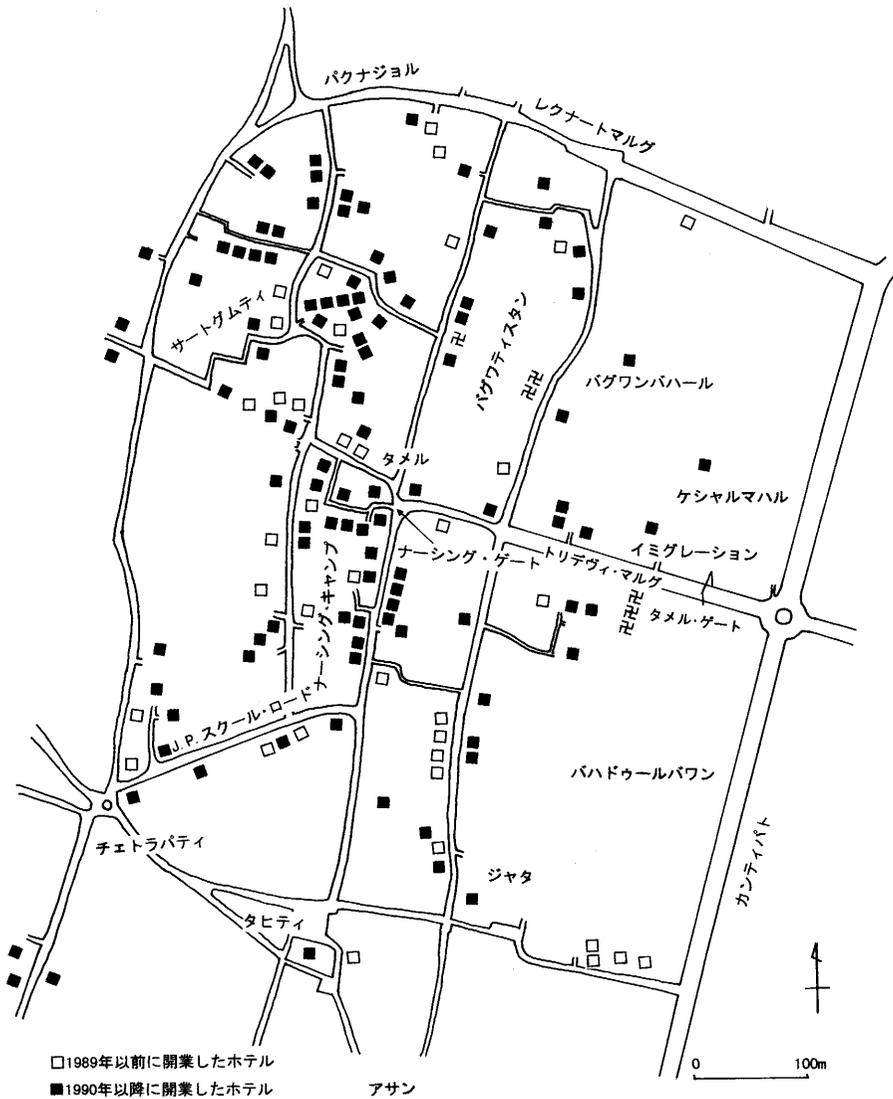


図3 「タメル」におけるホテルの分布（筆者作成、1996-97年調査時）

教（仏教）に縁があり、それ故チベットと関係があったことは、地名の語義と伝説が示すところである。そして、神々によって跳梁する魔物から庇護されていることが伝説からうかがえる。魔物に関してついでにいうと、タメル・ゲートからタメルに向かう通り、トリデヴィ・マルグ<sup>9)</sup>にあるヒンドゥー寺院は、魔物マヒシャースラ（水牛の姿をした魔物）を倒した女神ドゥルガの勝利を称えて建てられた（TTDC, 1997）。そのヒンドゥー寺院に隣接して、1980年代半ばに役所やレストラ

ンの入った複合ビルが建てられた。かつては窪地で鬱蒼とした竹藪が広がり、夕方になると幽霊が出たといわれるその場所は、今では夜中までディスコに出入りする人の往来で賑わっている。「夕方になると火の玉が浮遊していた」畑や空地には道が通り、夜には沿道を埋めるホテルの灯りがあたりを照らしている。かつて魑魅魍魎が跋扈していたあたりに、今は外国人ツーリストが闊歩している。

タメルの南、ジャタはネワール語で「仕事をす

る場所」を意味する (Shrestha, 2044)。今ではホテルが並んでいるが、かつては金銀細工師や陶工の作業をする姿がそこここに見られたという。ホテルの並びの先に僅かに残っている金銀細工や素焼を扱う店が、その名残を留めている。ジャタを西に行くとタヒティに出る。これもネワール語で、上の方(タン)にある水場(ヒティ)を意味する (Shrestha, 2044)。タヒティの広場の中央には現在ストゥーパ(仏塔)が築かれ、その下を水が流れているという。これらネワール語の地名で呼ばれるあたりにはネワールの古い家並みがあり、それらに囲まれるようにして寺院がある。

現在、「タメル」に住むラナは6-7世帯にすぎないが(1996年調査時)、20世紀の中頃には30-40世帯が住んでいた。今は姿を留めていないが、かつては威風堂々としていたであろう門(ナーシング・ゲート)をくぐるとラナの「大きな宮殿」があり、その一帯はナーシング・キャンプと呼ばれる。ナーシング・ラナ(ラナの一姓)が住んでいたことからその地名が固定化したのである。図1に記した大邸宅に比べれば「小さい」ものの、その周囲にある複数のラナの邸内には、今では古ぼけてしまったが、贅を凝らした調度品や動物の剥製等が設えられていたりする。これらの邸宅のうちのいくつかは、先述したシンハ・ダルパールの完成後、その余材で造られたという。また、J. P. スクール・ロードの沿道には、今は公立学校になっているが、かつてラナの子どもたちが通った学校がある。その場所に残る英語の地名から、外国文化を積極的に取り入れていたラナの足跡がうかがえる。

ツーリズムのコンテキストにおいては、タメルもナーシング・キャンプも均質な「タメル」に包摂されるが、その表層を剥ぐと、都市の周縁から都市へと発展していく過程で蓄積されてきたネワールやラナをはじめとした人々の営為が見えてこよう。

#### 4. 拡大するツーリストエリア、「タメル」

冒頭で述べたように、ツーリストエリアとしてタメルが急速に展開したのは、1990年頃からである。1997年現在営業していたホテルのうち1990年以降に開業した107軒は、それ以前に開業したホテル(37軒)の3倍弱である。ただし、閉

業したホテルに関しては情報を得られなかったので、調査を行った1996-1997年に経営していたホテルに限る。1968年にタメルに初めて開業したゲストハウス<sup>10)</sup>から「タメル」の展開が始まったとされ、1990年以前はそのゲストハウスのあるタメル周辺にホテルが集まっていた(図3)。ジャタにも複数のホテルがあったが、それらの古びた看板にはジャタ・カンティパトと記されており、開業当時は星付ホテルが数軒沿道にあったカンティパトの方がツーリストにとって「タメル」よりも有名であったことがうかがえる。最近では、ホテルの看板にタヒティ・タメル、ジャタ・タメルと記されるようになり、ツーリストエリア「タメル」が指示する範囲は、外延的に拡大し続けている。多くの外国人ツーリストに利用されているLonely Planetが発行するガイドブックにおいても、第一刷(1990年)で「タメル」のホテルとして30軒が記載されていたのが、1993年に発行された第二刷では74軒のホテルが記載され、「タメル」を指示する範囲も拡張されてグレーター・タメルとして紹介されている(Wheeler & Everist, 1990, 1993)

「タメル」はツーリストエリアとして地歩を確立してきたが、それを認識する立場が異なると、イメージも自ずと異なってくる。些か単純化しすぎるが、三つの立場から「タメル」のイメージを概観してみよう。まずは、ネパールの大多数に相当する「タメル」と無関係に過す人々の抱くイメージを考えてみよう。彼/彼女たちは主に新聞や雑誌などの地元の情報メディアや、人々の口を介して「タメル」に関する情報を得る。話題となるのは、ツーリストを対象にしたイベントの開催、風俗産業を含むツーリズム産業の展開、犯罪・事件の発生に関するものが多い。いずれも「タメル」に限られたことではないにもかかわらず、例えば売春業の横行の原因をツーリストがもたらす「西洋の文化」に還元するかたちで人々に伝えられる。こうして「退廃的な文化」に言換えられた「西洋の文化」が染付き、危険な雰囲気は漂う「タメル」のイメージが創り上げられてきた。それに対する二番目のイメージは、ツーリズムから経済的利益を引出そうとしている人々のもので、「タメル」は他の地域に比べて警察人口が高いから(高くなる理由はさておき)安全であると断言する。風俗産業の横行に関しては「ダーズリンから来た女を

インド人が買う<sup>13)</sup>と語ることによって、自分たちには関係のないこととして不問に付してしまう。あるいは、ツーリストエリアにおける必要「悪」として認める。企業／経済活動をする人にとって、ツーリズムから得られる国際間の経済格差を象徴する実入りの良さは、先の危険な雰囲気「タメル」から払拭してしまう。実際に成功する人はごく少数に過ぎないが、語り伝えられている成功物語が「タメル」を蓄薇色に彩っている。三番目のイメージは、外国人ツーリストの抱く「タメル」イメージである。彼／彼女らがネパールを知る手段として主にガイドブックを利用しているとすれば、「タメル」はバックパッカー用の安いホテルが集中している場所として認識されていよう。そして、「国際電話がかけられ、アップルパイを食べられる」場所であり、その一方で土産物屋の店頭にある「キッチュ」で「アンティーク」な品々に邂逅できる場でもある。ツーリストにとっては、遙か遠くの異国に居ながら自国の文化に触れることのできる場所でもあり、いわば非日常と日常が入り混じった曖昧な場所として認識されているといえよう。ここでは三つの「タメル」の顔を紹介したが、3章で確認した通り、そこには地名で指示される範囲が複数存在している。それらがツーリズムの展開に包摂されることで、「タメル」という名とそれにまつわるイメージの下に均質化され、今なお外延的に拡大し続けている。

## 5. むすびにかえて

国際ツーリズムの趨勢に連動して、これまでネパールはアルピニズムやヒッピー・ブームを経験し、今日、マス・ツーリズムの時代を迎えた。ヒッピー文化のイメージが固定化されたジョチェンの次に登場した「タメル」は、マス・ツーリズムの展開に伴い「商品化」され、今も外延的拡大の途上にある。「タメル」の「商品化」を成功させた要因の一つは、ツーリストに流通するガイドブックなどの情報メディアである。成瀬（1993）が指摘するように、場所は地名商標を伴って情報メディアを通して「商品化」される。そしてその商品価値が消耗していくと、更なる価値を付加していくために新しい価値が開発され、あるいは過去に価値が求められることもある。ツーリストを惹き寄せることを第一義におく「タメル」について

いうならば、ネパールに展開してきたツーリズムの辿ってきた歴史——アルピニズムや桃源郷のイメージ——が、その商標として付加されたとしても不思議ではない。かつて外国人に語られたネパールの桃源郷のイメージを自ら売り出し、そしてそれが「タメル」自体を形容することを意図していないにしても、視界に入る言葉が桃源郷を思わせようとしている。しかし、ガイドブックを通してそこに創り上げられてきたのは、安さを求めるバックパッカー向けのツーリストエリアとしてのイメージである。そして実際には、乱開発による混沌とした景観——乱立した建物や年中上下水道管を掘返す為にでこぼこの道路——が厳然たる事実としてある。視界に入る言葉がいくら桃源郷を思わせようとしても、それらは「キッチュ」なものに変換されてしまうだろう。かつてヒッピー文化のイメージがジョチェンの発展の桎梏の一因となったように、このようなイメージが「タメル」の限界を招来することになるかもしれない。

## 謝辞

現地調査にあたって、トリブバン大学のR.K.Panday教授、ネパールの主要紙のツーリズム担当記者であるR.Tiwari氏をはじめ、多くの人々に便宜を図って頂いた。記して謝意を表したい。また、1997年10月からの1年間はトヨタ財団の助成を受けて研究・調査を行った。

## 注

- 1) 広大な庭園と1,000以上の部屋を有するその宮殿は、ネパール最大の建造物であることはもとより、南アジアにおいても最大級の建造物とされる（Theopile, 1995）。現在ではそれらの建物は各省庁に利用され、庭の一部は駐車場となっている。
- 2) Sahit（1991）がネパール初の人口統計（1853—1856年）を紹介する際に都市域としていた範囲を参考にすると、トゥクチャ川以西、ビシュヌマティ川以東、バグマティ川以北、タメル以南で囲われた地域となる（図1）。当時ネワールの居住地の中心地であるアサンには約9,000人が、現在では「タメル」に包摂されるタビティには1,300人が居住していた。
- 3) 例えばGallagher（1992）、Karan, P. P. eds.（1996）等。
- 4) 宿泊施設とはいえ、民家の居住空間の一隅にごぞを敷き、客に提供した簡易なものであったという。その当時、登山家が利用したのは、市街地及びその周

辺に点在する中小規模のラナの建物を利用したホテルであった。

- 5) 外国人（インド人は除く）ツーリスト数は1962年に6,179人であったのが、1970年には45,970人、1982年には144,961人と急増している（Department of Tourism, 1997）。
- 6) ラナの庭付き邸宅は、現在レストランやホテルに利用されているものも少なくない。
- 7) 西暦紀元前57年を起年とし、4月中旬を新年とするネパールの公式暦のヴィクラム暦。
- 8) バグワンとは神（あるいはヴィシュヌ神）を意味し、バハールはビハールに同じく寺院を意味する。
- 9) 三人（トリ）の女神（デヴィ）の大通り（マルグ）という意味。
- 10) 自宅として居住していたラナの邸宅の一郭を開放してゲストハウス（13室）を始め、1996年の調査時点では120室を擁し、「タメル」で最も有名なホテルとなっている。
- 11) 決り文句のように繰返される「インド人は女を買う」という語りには、インド人に対する偏見がさしはさまれていることを考慮する必要がある。

#### 文献

- Britton, S. (1991) Tourism, capital, and place: towards a critical geography of tourism, *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol.9, 451-478.
- Department of Tourism (1997) *Nepal Tourism Statistics 1996*, HMG of Nepal, Ministry of Tourism and Civil Aviation, Department of Tourism, Kathmandu.
- Gallagher, Kathleen M. (1992) Squatting in the Kathmandu Valley: A Historical Perspective, *Contributions to Nepalese Studies*, Vol.19-2, Kathmandu, 249-259.
- Karan, P. P. eds. (1996) Settlements and urbanization, *Nepal A Himalayan Kingdom*, United Nations University Press, Tokyo, 177-204.
- Sahit, Bibran (1991) Nepalko Pratham Janaganana 1910-1913 Janasankhyako Itihas tatha Wastika Bikas Sambandhi, Regmi, Jagadish Chandra ed. *The First Census of Nepal 1853-1856*, Office of Nepal Antiquary, Kathmandu, 1-106.
- Shrestha, Krishna Prakash (2044) *Sthan nam-kosh*, Nepal Rajkiya Pragya-Pratisthan, Kathmandu, 182.
- Theophile, Erich (1995) Neoclassical Nepal-The Rana Palaces, Proksch, Andreas ed. *Images of a Century The Changing Townscapes of the Kathmandu Valley*, Deutsche

Gesellschaft für Technische Zusammenarbeit GmbH, Urban Development through Local Efforts Projects, Kathmandu, 108-125.

Thamel Tourism Development Committee (TTDC) (1997) *Map of Thamel*, Kathmandu

Wheeler, Tony & Everist, Richard (1990) *Nepal a travel survival kit 1st ed.* Lonely Planet Publications, Australia, 345.

Wheeler, Tony & Everist, Richard (1993) *Nepal a travel survival kit 2nd ed.* Lonely Planet Publications, Australia, 425.

内田順文 (1987) 地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——, *人文地理* 39-5, 1-15.

成瀬厚 (1993) 商品としての街, 代官山, *人文地理* 45-6, 63-75.